漫然投与に対する対応

漫然投与を回避し、退院後も薬剤師外来で継続介入を行っている症例

【入院時処方内容】

	薬剤名（一般名）	規格	1回量　用法
1	リナグリプチン錠	5mg	1錠　朝食後
2	ロサルタンカリウム/ヒドロクロロチアジド配合錠	50mg /12.5mg	1錠　朝食後
3	フェブキソスタット錠	10mg	1錠　夕食後
4	ドキサゾシン錠	4mg	1錠　夕食後
5	グリメピリド錠	1mg	1錠　朝夕食後
6	ニフェジピンCR錠	20mg	1錠　朝夕食後
7	五苓散料エキス錠	-	3錠　毎食前
8	エチゾラム錠	0.5mg	1錠　寝る前
9	メコバラミン錠	0.5mg	1錠　毎食後
10	ウルソデオキシコール酸	100mg	1錠　毎食後

内服薬　：　10種類	薬剤管理：　本人管理
服薬回数：　7回	服薬支援：　一包化

【退院時処方内容】

	薬剤名（一般名）	規格	1回量　用法
1	リナグリプチン錠	5mg	1錠　朝食後
2	グリメピリド錠	1mg	1錠　朝夕食後
3	ミグリトール錠	50mg	1錠　毎食直前
4	ロサルタンカリウム錠	25mg	1錠　朝食後
5	アピキサバン錠	2.5mg	1錠　朝夕食後
6	ポラプレジンク口腔内崩壊錠	75mg	1錠　朝夕食後

内服薬　：　6種類	薬剤管理：　本人管理
服薬回数：　5回	服薬支援：　一包化（簡易懸濁法）

【患者情報】70 歳代　男性　入院患者　（入院期間：　70 日　）

診療科：耳鼻咽喉科

主疾患	舌癌術後頸部リンパ節腫脹、2型糖尿病、高血圧、脊柱管狭窄症、心房細動				
病歴	舌癌（2年前）、糖尿病・高血圧（12年前）、脊柱管狭窄症（9年前）、心房細動（入院中）				
生活状況・入院契機など患者背景	2年前に舌癌に対して、舌部分切除を行い経過観察中であった。1ヵ月前のCTで左頸部にリンパ節腫脹を認め、左頸部リンパ節郭清の目的で入院となった。				
認知症	なし		介護認定	なし	
薬剤有害事象	なし	（　　）	副作用歴	なし	（　　）
アドヒアランス	良好	（　　）	アレルギー歴	あり	（　小児喘息　）

【入院時情報】

入院時の血糖値：151mg/dL、HbA1c：6.5%、尿酸値：5.0mg/dL、血圧：110/70mmHg 台であった。

エチゾラムはかかりつけ医から処方となっていたが、本人が自己調節しており、毎日服用はしていなかった。

【key word】

薬学的な管理、入院時の持参薬鑑別、薬歴聴取による処方提案、定期的な処方見直し、多職種との連携、副作用等による健康被害が発症した時の対応、退院指導時の情報提供によるアドヒアランスの向上・維持

【処方見直し前の問題点】

①入院時に服薬状況について本人に確認したところ、服薬量も多く不必要な薬剤はなるべく少しでも薬を減らして欲しいとの希望を聴取していた。
②脊柱管狭窄症に対しては現在は状態が安定しているとのことであり、メコバラミン錠が漫然と投与されている状態であった。
③五苓散、ウルソデオキシコール酸はかかりつけ医も処方意図が不明のまま漫然と投与されていた。
④入院時はフェブキソスタット服用中であったが、尿酸値は正常値であった。12年前から指摘はあったとのことだが、いつから尿酸値が高値となったのか、いつから服用を開始したのか詳細が不明であった。
⑤手術後は、経鼻胃管より薬を投薬していた。手術後の血圧は90/50mmHg台から130/70mmHg台と大きく変動しており、不安定な状態であった。不安定な状態にもかかわらず、持参薬はすべて継続指示がなされていた。持参薬再開に伴い低血圧のリスクも考えられ、また経鼻胃管から簡易懸濁法で投与していることからもニフェジピンCR錠は代替薬も協議する必要があった。

【処方提案の具体的な内容】

①本人希望を聴取し、医師に薬を減らしていくことを提案し受け入れがあった。
②現時点で症状が安定しているため、まずはメコバラミン錠の中止を提案し、受け入れがあった。
③また、処方意図が不明な五苓散、ウルソデオキシコール酸は服用量も多くなるためコンプライアンスを考慮し、入院中に一度中止してみてはどうかと提案し、受け入れがあった。
④入院後一時中止もあったが、尿酸値4.5～5.0mg/dLを推移しており、医師と協議の上中止となった。
⑤術後ニフェジピンCR錠、ドキサゾシン錠、ロサルタンカリウム/ヒドロクロロチアジド配合錠の再開指示がなされていた。血圧が不安定であったことから低血圧のリスクも考慮し、主治医と協議した。ドキサゾシン錠を中止し、ロサルタンカリウム/ヒドロクロロチアジド配合錠はロサルタンカリウム錠25mgへ変更した。またニフェジピンCR錠は簡易懸濁での投与が不可能であったため、ニフェジピン錠へ切り替えを提案した。ロサルタンカリウム錠、ニフェジピン錠が再開となったが、血圧低値となったためにニフェジピンは中止する方針となった。3剤4種類服用していた降圧薬に関しては糖尿病の既往歴を考慮し、ARBのみ低用量で継続していく方針となった。
【補足事項】
　術後より頚部静脈血栓症を認め、アピキサバン錠が追加となり退院後も継続処方となった。また退院の3週間前に味覚異常、亜鉛欠乏を認め、保険適応外ではあるがポラプレジンク口腔内崩壊錠が処方となり、退院時にも処方はあったが、その後の外来で投与は終了となった。術後に胃瘻造設を行い、退院後もご自身で簡易懸濁法で薬剤を投与することとなった。経腸栄養剤を投与後に血糖上昇を認め、経腸栄養剤投与前にミグリトールを投与することとなり、ミグリトール錠が追加となった。

【多職種との関わり】

職　　種	主な連携内容
医師	薬剤の必要性を協議、 処方提案、 中止薬の提案
看護師	コンプライアンスについて協議、 薬剤の必要性を協議
かかりつけ医	退院時薬剤情報提供書を用いて中止薬について情報提供
保険調剤薬局	退院時薬剤情報提供書、 お薬手帳を用いて中止理由について情報提供

【減薬後の経過】

①退院時には本人、妻ともに薬が減ったことに対してよかったとの発言もあった。結果的に簡易懸濁法での投与ではあったが、不必要な薬剤が中止となったことでアドヒアランス向上に貢献できたものと思われる。退院時にはお薬手帳に中止薬について記載を行い、薬剤師の退院指導書に中止薬についても記載を行った。かかりつけ内科医、外科医、保険調剤薬局にも退院指導書を用いて情報提供を行うよう本人に指導した。また、当院では退院後に継続介入が必要な症例は薬剤師外来でも継続介入を行っている。今回の症例も減薬に伴う症状確認を行うため、退院後も薬剤師外来で症状確認を行った。薬剤師外来でポラプレジンクが漫然投与とならないよう確認を行い、また服薬コンプライアンスも確認したが、管理がしやすくなったと本人からの発現もあった。薬剤師外来では含嗽薬の希望があり処方提案を行った。
②退院後の薬剤師外来で症状を確認したが、メコバラミン錠の中止後も神経症状は出現なく経過している。
③浮腫などの出現、肝機能障害などを薬剤師外来でも確認しているが、中止後の症状は特に出現なく経過している。
④退院後も尿酸値4.5～5.3mg/dLと正常値を推移している。
⑤血圧上昇はなく、めまい、ふらつきなどの症状もなく経過している。
⑥エチゾラム錠は自己調節で服用しており、入院中も中止していた。退院後も特に症状の悪化はなく、処方希望もないとのことであった。